

## 審査結果の要旨

### (1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

これまで、知的障害幼児の相互交渉の発達及び支援については個体能力論の立場から検討されることが多く、社会スキルが獲得されてから仲間関係が形成されるとし、SST（ソーシャルスキルトレーニング）や応用行動分析を用いて個体能力を支援する研究がなされてきた。本研究は知的障害幼児の遊びの発達特徴や保育フィールドにおける支援特徴をふまえて、知的障害幼児の相互交渉の発達及び支援について、従来の個人内能力の獲得という視座だけではなく、関係論から分析、検討し、知的障害幼児の周囲にアプローチする支援方法を提示している点に、独創性及び学術的価値を有するものと判断される。また、本研究は保育所をフィールドとした実践研究を行い、保育カリキュラムの下で適用可能な支援方法の検討を目的としており、保育実践と発達臨床心理学的をつなぐという点からも意義を有している。これは保育における知的障害幼児の支援方法として新たな視座を示すものであり、発達臨床心理学、保育学、特別支援教育における意義を有している。

### (2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文は、知的障害幼児の遊びの発達と定型発達幼児との相互交渉及び保育者の支援について包括的に検討するために実験研究、保育フィールドを対象とした調査研究、保育実践フィールドにおける質的研究を展開した。調査研究においては、保育所を対象に乳幼児の年齢による発達特徴とこれらに応じた保育カリキュラムを踏まえて研究計画及び質問紙が作成され、個人情報保護や倫理的配慮を行いながらデータの整理、分析、考察がなされている。実験的研究、質的研究においても当該分野の先行研究に則った手続きにより、倫理的配慮を踏まえながらデータを収集、整理、分析、がなされている。

以上のように本研究は、発達臨床心理学、保育学、特別支援教育の実践研究において、量的研究として十分な水準にあり、質的研究として実証性の高い方法がとられ、当該研究分野において妥当であると考えられる。

### (3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本研究において、実験的研究、調査研究においてデータの収集、統計的手法による分析がなされている。質的研究においては長期間の観察及び保育者からの記録やカンファレンスなど多面的なデータの収集、分析がなされている。研究においてはデータ収集、個人情報保護及び倫理的配慮、結果の公表と社会的還元が不可欠であるが、本研究ではそれらが適切になされている。

### (4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか。

保育フィールドにおける知的障害幼児と定型発達幼児の間の相互交渉は必ずしも良好とはいえ、その要因は知的障害に起因する発達の遅れにあり、知的障害幼児は遊びの発達に遅れを示している。これまで個体能力論の立場から個の相互交渉の発達や個のスキルの向上への支援が多く行われてきたが、本研究は保育フィールドにおける観察から知的障害幼児の定型発達幼児との相

相互交渉を関係論的分析し、保育者が遊びを通して周囲のもの、人、ことに働きかけて状況をつくることにより、関係構造が変容し、集団への十全的参加なされることや、定型発達幼児と対等な関係性での相互交渉と遊びの展開が可能であることを示し、保育者が、もの、人、ことを媒介にして状況をつくることより密度の濃い接面を形成することや、シェアリングボイスを用いることにより共同性、関係性が発展し、保育者の支援としての有効性を示した。これらは保育フィールドにおける調査から明らかにされた、配慮された保育として対応する支援モデルへのニーズに合致するものであると考えられた。

以上の結論は適切な方法手続き、分析に基づいて導き出されたものであり、理論的にも妥当である。本研究の結果は保育実践においても適用可能であり、十分な学術水準に達していると評価される。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか。

従来の研究は、知的障害の未獲得スキルの獲得支援など個体能力の視点からの研究が多くなされてきたが、本研究では関係論から個の周囲の状況である“ひと”“もの”“こと”に視点をあてて分析し、相互交渉の支援が可能であることを示した点で独創性がある。また、関係論からの支援により、発達の遅れがある知的障害幼児が、定型発達児と対等に相互交渉し遊びを進展させることが可能であることを実証的に示した点で意義がある。

本研究の結果は発達の遅れから社会的スキルが十分に獲得されていない知的障害幼児も対等な関係性で定型発達幼児と相互交渉や仲間関係の形成が可能であることを示しており、仲間関係の発達モデルや相互交渉の支援モデルに示唆を与えるものである。また関係論的な支援方法は、保育が生活や遊びを通して行われるという保育カリキュラムに合致していること、保育フィールドで求められる「配慮された支援として対応する」支援モデルに応ずるものであり、保育カリキュラムのなかで保育者が支援可能な発達臨床心理学的方法を提示している。

これらの研究成果は、発達臨床心理学、保育学、特別支援教育の発展に寄与するものとして、学問的意義が高いと認められる。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員一致して、本研究が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）学位授与に十分に相応しい優れた研究であると評価した。